

キリストとともに十字架につく

1. 青年は言った。「驚いてはいけません。あなたがたは、十字架につけられたナザレ人イエスを捜しているのでしょうか。あの方はよみがえられました。ここにはおられません。ご覧なさい。ここがあの方の納められた所です。(マルコ 16:6)
 - a. イエスが十字架についたのは偶然ではない。イエスはその使命を持ってこの世に来られ、棕櫚の日曜日にエルサレムに入城された時ご自分の身に起こることをすべてわかっておられた。
 - b. 受難週に起きた出来事を思い起こしてみよう。人間にとってこれほど苦難に満ちた一週間というのはおそらくないであろう。第一日目は群衆がイエスをたたえたが、一週間もしないうちに全員がイエスに背を向けるようになることをイエスだけは知っておられた。この一週間にイエスが耐えねばならなかった精神的苦悩を考えてみよう。もしあなたがあと一週間しか生きられないと言われたらおそらく次のようなことは予定に組まないだろう…1) すべての人から拒絶される 2) 親しくしていた人たちから裏切られる 3) すべての友人から見捨てられそのうちの何人かはあなたを知らないと言う 4) あざけられ、拷問を受け、犯罪人として死に、あなたのことをインチキだと思っていた人は正当化され、あなたを知らなかった人はあなたのことを犯罪人だと思い、あなたの敵は満足する。
 - c. 霊的領域では2つのことが起こっていたといえる。1) サタンはイエスがそのご性質に反して罪を犯すように仕向けようと努力した(そうすればイエスには完全な供え物としての資格がなくなる)。 2) サタンはイエスを殺せば自分が勝つと考えていたので、イエスの死を望んでいた。
2. 私たちの語るのは、隠された奥義としての神の知恵であって、それは、神が、私たちの栄光のために、世界の始まる前から、あらかじめ定められたものです。この知恵を、この世の支配者たちは、だれひとりとして悟りませんでした。もし悟っていたら、栄光の主を十字架につけはしなかったでしょう。(1コリント 2:7-8)
 - a. この時代の支配者たちは神の聖さや神の義の背後にある力を理解していなかった。彼らは完璧な人生を送り不当な死に方をした人など見たことがなかった。それは人類を救うために必要な構成要素だった。イエスの死というのは、それを入り口として死に直面し、死に打ち勝ち、人類から罪を取り除くために必要だったのである。
 - b. 隠された奥義としての神の知恵の一つは、「一粒の麦がもし地に落ちて死ななければ、それは一つのままです。しかし、もし死ねば、豊かな実を結びます。(ヨハネ 12:24)」ということである。死ぬということは形が変化し数が増えるために通らねばならないステップである。死とは永遠のいのちへの道である。もしあなたの人生を転換し、それを幾倍にも増やし、意味あるものにしたければ、神があなたの人生のある部分を殺そうとされていることを受け入れなくてはならない。そうすることによってイエス・キリストの復活の力を体験できるのである。
3. 私はキリストとともに十字架につけられました。もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられるのです。いま私が、この世に生きているのは、私を愛し私のためにご自身をお捨てになった神の御子を信じる信仰によっているのです。(ガラテヤ 2:20)
 - a. イエスの人生は、死を受け入れながら生きた人物の究極の例である。イエスにとってはこの世からどう思われようと、またこの世が彼に何をしようとする問題ではなかった。イエスは仕え、みことばを成就し、そして死ぬために来られた。
 - b. 新約聖書のうちの多くの書を残し、かつてはクリスチャンを迫害、殺害していた使徒パウロも、イエスに身をささげてからは死と十字架を受け入れる生涯を送った。
 - c. キリストとともに十字架につくとは、あなたの個性、性格、ユニークさを失うということではなく、むしろあなたのうちにあるいのちが神から油注がれた「キリスト」(キリストとはイエスの苗字ではない)によって表され、本当に価値ある人生を送れるようになることである。
4. それから、イエスは弟子たちに言われた。「だれでもわたしについて来たいと思うなら、自分を捨て、自分の十字架を負い、そしてわたしについて来なさい。いのちを救おうと思う者はそれを失い、わたしのためにいのちを失う者は、それを見いだすのです。(マタイ 16:24-25)